

おはなし散歩道

天狗が見ていた

町田市 大澤桃代

「あつ！天狗がいる」
修司が叫んで、ホームの端へと走ります。朶も走りません。乗り換えの高尾駅に、大きな天狗の像がありまして。みんな来ると思ったのに来ません。朶はドキドキしました。修司とは朝からいっしょでしたが、ほとんど話していませんでした。

「相模湖駅」へ行く電車は、通過電車の後来るようです。小学校最後の思い出に、クラスで高尾山に行った帰りです。修司は春休み中に引越して、違う中学に行きます。みんな階段の所にいます。トイレに行った友だちを待っているのです。
「長い鼻だね。ねえ、二年の時の劇、覚えてる？」
修司の言葉に、朶は驚きました。同じ事を考えていたからです。やっぱり

天狗の鼻を見て思い出していました。小二のお楽しみ会で「ふしぎな太鼓」の劇をしました。それは、叩くと鼻が伸び縮みする源五郎の太鼓の話です。劇で鼻を伸ばす方法は、源五郎役が自分で風船をふくらます事になりました。修司が考えたのです。

班で話し合い、修司が源五郎をやり、朶がト書きを読みました。修司が風船を持ったとたん、みんなが笑いました。先生もです。最初、風船は全然ふくらみませんでした。朶も吹き出しました。何とか風船はふくらみましたが、それがまた笑いを誘いました。劇の後、修司は班の全員に謝りました。あの時から朶は修司を好きになりました。誰にも内緒でした。

「わたし、笑って読めな

くなつたんだ、ごめんね」
「僕も笑って風船に息が入らなくて。あの劇は、受けまくったよね」
修司が朶の顔を覗きま



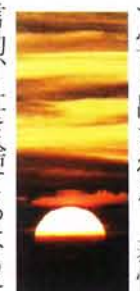
ました。
「この天狗の鼻って、どれくらい長いのかな？」
鼻は修司の広げた手の幅よりは短いけど、天狗の顔まで入れれば、像の方が長いです。
「あー、天狗に負けてる」
修司が朶の手を取りまして。これなら、負けない。朶は驚きました。

鼓がほしい、と朶は思いました。電車が通過するたびに、電車が長くなって、ずとずと通過が続いてほしいと。
ゴゴ……ゴウ……、電車が通り過ぎます。でも、修司は手を離しません。驚いて、朶が修司を見たとき、今度は上り電車が通過します。天狗の目が、じつと電車を見ています。それから、また下りの通過電車が来ました。手はずと繋がれたままです。
「手紙書くよ」
修司の言葉に、朶は、「わたしも」
と、顔を上げて答えます。いつの間にか、みんながそばにいました。
「修司が告白した」
男子がからかいます。各駅停車が来て、朶は修司と座りました。窓からチラッと見えた天狗が、笑った気がしました。朶は天狗に頭を下げました。修司も下げました。二人で笑いました。(完)
(さし絵・小出 茂)



立春も過ぎて、旧暦では今年の二月十九日が、新しい年の始まりです。中国では春節と言いますが、新暦の正月に比べ盛大に祝賀が行われています。この一年を祝福するよ

うな、きりつとした冷たい空気、雲一つない青空が広がっています。こんなにも素晴らしい空を、空気を、大地を、風を、光を……そのすべてに感謝です……新たな一年を、一日を大切に生きなくては……
それなのに、この青空に向って銃を向ける人達がいるなんて……私達日本人は、この穏やかな自然が、ひとたび牙を向いたら、街も営みも、政治・経済・宗教も……人間の作ったものなんてひとたまりもなく奪われてしまうことを、思い知



らされています。漆黒の宇宙の中で、神様から奇跡のように与えられた、かけがいのないこの小さな星の上で、彼らはいったい何をしようとしているのでしょうか？
惨たらしい映像を通して写し出される、表情、言動、吐き捨てるように語られる殺戮のアジテーション……疑問、哀しみ、憤り、怒り、不安……そのすべてを通り越して、何か茫然としてしまします。片や愛する人を奪われた哀しみの声、涙が渦巻いて……いったい何が起きているのでしょうか……？
何だか暗澹とした気分……マイナスのエネルギーが覆いかぶさってくるようです……
でも負けてはいけません！こんな時こそ、祈り、願い、どんな小さなことでも何でも、それぞれの出来ることで、プラスのエネルギーを送り続けなくては……暖かさや優しさや柔らかさが、愛する事、いとおしむ事、助け合う事、寄りあう事、感謝する事、微笑む事の素晴らしさを、想いを交わし合う事の大切さを、心で言葉で叫び続けなくては……と思うのです。
亡くなられたジャーナリストの方達のように、遠い国で苦しんでいる人達の為に、声を上げられない力のない女性や子供達の為に、捨て身で活動なさっている方達には、頭が下がります……今自分のできることで、静かに強くエネルギーを送り続けたいと思っています。
御冥福を
祈りながら……
合掌

高尾山

四季の草花



シキミ科・シキミ属
シキミ 櫛
仏事に使われる木としてよく知られています。
「シキミの語源はこの木が常緑で四季を通じて緑色が美しいことから「しきび(四季美)」と言われ「シキミ」に転訛されたという説と、実が有毒で「悪しき実」からとも云われています。
花は葉の付け根から一ケずつ出て、花弁は淡黄緑色で細長く十枚〜十五枚付きます。年が明けると咲き始めます。
常緑の小高木で十メートルほどになり、葉は単葉で互生し倒卵状楕円形をして葉はやや肉厚で表面は濃緑色で光沢があります。
高尾山薬王院から福德弁財天へ通じる道の右側の建物付近と高尾山頂へ歩く途中の右側にあります。
高尾山薬王院では「御護摩」を焚くときに使われています。
(撮影・文 中村 毅人)